産業の歴史をひもとく年代記

沖縄産業クロニクル

県民の暮らしに密接に関わるさまざまな産業はどう始まった？その変遷と展望を紹介します。

監修・山内昌斗（専修大学経営学部教授）

第6回 倉庫・物流編

変わり続ける沖縄の倉庫・物流業界

1914年、県民から「ケービン」と呼ばれた沖縄県営軽便鉄道が開業しました。ケービンは那覇駅と与那原駅、嘉手納駅、糸満駅を結び、旅客や物資を運びました。当時、沖縄の主要産業は農業で、特にサトウキビの栽培が中心でした。ケービンは製糖工場への原料搬入や製品輸送に利用され、糖業の発展に貢献しました。しかし、沖縄戦に突入し営業を停止すると、復興されることなく消滅しました。

戦後、極度に物資が不足していた沖縄には、ガリオア資金による食糧・物資の援助が行われ、物資保管のための倉庫が各地に設立されました。やがて、それらの倉庫は民営化され、沖縄の物流を支える存在となります。さらに、米軍によりUSAハイウェーナンバー1（1号線／現在の国道58号）が拡張・整備され、トラックによる輸送が活発になりました。

小売業者の中からは、自ら流通部門や物流子会社を設立する動きもありました。倉庫は単なる商品保管の場所ではなく、商品の加工やパック詰め、値付け・仕分けなど、店舗のバックヤードで行っていた作業を一括して行う流通センターへと変わりました。業務効率が大幅に改善し、小規模小売店から大手スーパーマーケットへと成長を遂げる原動力となりました。

ネットショッピングが急成長した2000年代以降、宅配便が急拡大し、物流は私たちにとって身近な存在となりました。しかし、商品配達の爆発的な増加とともに物流の効率化が重要課題に。各企業ともデジタル技術を活用した改革を推し進めています。

ケービンが大活躍

戦前のサトウキビ運搬車（那覇市歴史博物館提供）

物流の主要道路が整備

那覇を通るUSAハイウェイナンバー1（1963年撮影／沖縄県公文書館所蔵）

倉庫があることで物流はさらに盛んに

荷物を乗せて走る琉球中央倉庫のトラック（那覇市歴史博物館提供）

新設される物流センター

琉球ロジスティクスセンター（琉球海運（株）提供）

あんしん総合流通センター（（株）あんしん提供）

沖縄倉庫・物流年表

大正

1914年 沖縄県営軽便鉄道（後に沖縄県営鉄道へ改称）開業

昭和

1945年 米軍が那覇-名護間をUSAハイウェーナンバー1として整備
1950年 沖縄中央倉庫（株）（現琉球物流（株））設立
1964年 琉球通運（株）設立
1967年 安信運送（現（株）あんしん）営業開始
1982年 サンエー運輸（株）設立
1985年 沖縄ヤマト運輸（株）設立
1986年 カンガルー沖縄西濃運輸（現沖縄西濃運輸（株））設立

令和

2019年 「那覇港総合物流センター」開業
2022年 大和ハウス工業（株）が豊見城市に「DPL沖縄豊見城」竣工
2022年 アマゾンジャパン（合）がDPL沖縄豊見城内に「豊見城デリバリーステーション」開設
2023年 沖縄ヤマト運輸（株）の仕分け拠点「沖縄ベース」本格稼働
2023年 （株）あんしんと日本GLP（株）の共同開発による「GLP沖縄浦添（あんしん総合流通センター）」完成
2023年 琉球海運（株）「琉球ロジスティクスセンター」完成

注目トピックス

沖縄は東アジアの物流ハブに

1 沖縄の経済を支えたケービン 沖縄県営軽便鉄道

（那覇市歴史博物館提供）

ケービンは軽便鉄道法に基づき、一般的な鉄道よりも低規格・安価に敷設された鉄道でした。製糖業の発展に貢献したほか、1941年には乗客数が300万人台に達し、県民の交通手段としても活躍。しかし、沖縄戦で被害を受け、戦後は事業免許の失効手続きがなされたかどうかもわからないまま消滅しました。

2 物流のDX化 沖縄ヤマト運輸「沖縄ベース」

（沖縄ヤマト運輸（株）提供）

2023年、沖縄ヤマト運輸は沖縄ベースを稼働させました。クロスベルトソーターと呼ばれる機械を導入し、仕分け作業の自動化を実現。従来、1時間当たり3千個だった仕分け能力は、1時間当たり1万3千個へと4倍以上に増加しました。DX化を進めることで、物流危機を乗り越える試みがなされています。

3 大規模物流センターが続々設立

2019年に那覇港総合物流センター、2022年にDPL沖縄豊見城、2023年にGLP沖縄浦添および琉球ロジスティクスセンターが誕生するなど、ここ数年の間に県内で大規模な物流センターの設立が相次いでいます。県内消費量の拡大も踏まえ、物流は社会インフラとして進化し続けています。急成長する東アジアの中心に沖縄が位置している優位性をいかし、県では国際物流拠点の形成に向けて取り組んでいます。

物流効率化の鍵を握る「ラストワンマイル」

物流の最終拠点から消費者に商品が届けられるまでの最後の区間を、ラストワンマイルと呼ぶことがあります。現在、その区間はドライバーが担っていますが、これをドローンや宅配ロボットに置き換えるための実証実験が行われています。近い将来、人間に代わってドローンが空を飛び交い、宅配ロボットが道を歩き荷物を届ける世界が訪れるかもしれません。

未来はロボットやドローンが家まで配達するようになるかも？